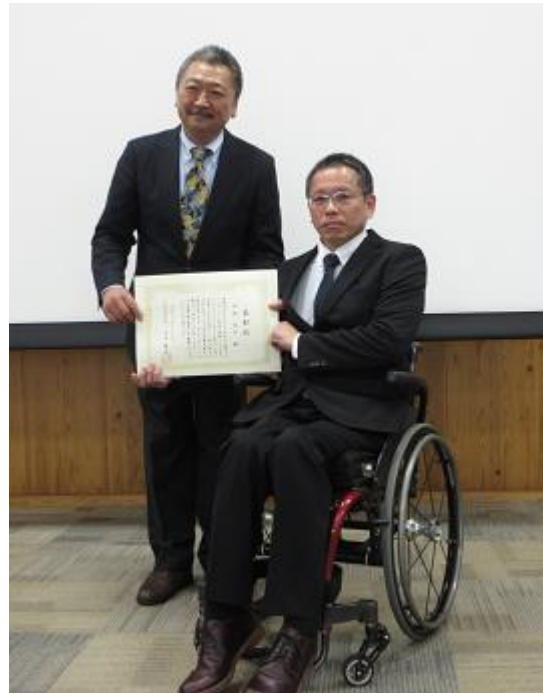


四国運輸局では、消費者ニーズや消費者行政上の課題を把握し、その結果を行政に役立てていくことを目的として公共交通機関の利用者等を対象にインタビューを行っています。

今回は、全国脊椎損傷者連合会香川支部副支部長の田村治仁さんにお話を伺いました。

田村さんは、脊損連合会のほか、香川県障がい者スポーツ指導者協議会においても役員を務めるかたわら、高松市障害者施策推進懇談会委員としても障がいの立場からバリアフリー施策推進に積極的に関わっておられます。

また、スポーツクラブ活動を通じて「心のバリアフリー」の啓発にも積極的に取り組んでおり、四国運輸局主催のバリアフリー教室では10年に亘り講師を務め、平成31年2月27日には、四国運輸局優良事業者等表彰（福祉・バリアフリー）を受賞されました。



四国運輸局長表彰を受ける田村治仁さん

 差し支えなければ、田村さんの障がいについて教えていただけますか？

19歳の時に建設現場の事故で脊髄損傷になりました。おへそから下の骨が折れ（胸椎十番を骨折）、後遺症が残り、そこから車椅子の生活になりました。

今から30年前、当時は「バリアフリー」ということもあまり言われておらず、障がい者は邪魔者扱いされ、差別的な扱いも受けました。うどん店に行っても、車椅子での来店は営業妨害だ、と言われたりもしました。

 今では考えられない話ですが、田村さんもおつらかったのではないですか？

私の勝手な判断で建設現場の機械の下に入ったのがもとで、事故が起こったという面もありましたし、自分が落ち込んでいる姿を見せると、機械の運転手や仲間に悪いという思いもありました。

医師から「一生車椅子生活になる」と告知を受けた時には「ああ、もう治らないんだなあ」と思いましたが、病院のスタッフからの様々な情報提供や多くの方からのあたたかいサポートを受け、社会復帰が叶いました。そして、復帰後、いろんなことを始めていくことになったのです。



「バリアフリー推進四国地域連絡会議」にて

車椅子バスケットを始めたのは、その頃からですか？

30年前の香川県では、車椅子利用者ができるスポーツはほとんどありませんでした。車椅子バスケット、卓球、アーチェリーと選択肢が限られていて、その中で興味があったのがバスケットでした。

最初は競技者として活動し、途中で女子バスケットチームのコーチを5

年間務めました。その中で、障がいや性別の違い、さらに障がいにも程度の違いがあり、そういった選手を指導しながらチームとしてまとめていく難しさを感じると同時に、もっと障がいのことを知りたいと思うようになりました。障がい者のスポーツ指導に関わっていくようになったのは、そんな経験からです。

さらに、障がい者に対してスポーツ指導をする中で、世間では障がい者のことを「障がい者」と簡単に一括りにされているのではないかと、という疑問が湧いてきました。

障がい者といっても、まず「身体・知的・精神」の3つに分けられます。身体だけでも、肢体不自由や聴覚、視覚など、細かく分かれまますし、さらに、視覚障がい者の場合は、視野狭窄、色覚障がい、先天性、後天性…など、症状は様々であるのに「障がい者」と一括りにされてしまうことが多いのです。

以前、障がい者のスポーツ団体を通して身体障がい者に集ってもらい、困ったことや何か問題がないか聞いたことがあります。すると、自分の障がいの環境さえ良くなれば、他の障がい者のことは関係ない、他の障がいのことまで考える余裕がないという人が多いことが分かりました。

では、車椅子利用者にとってだけ使い勝手の良い施設を作ればいいのでしょうか？でも、それは他の障がい者にとっては使いにくいものになるかもしれません。それではいけないと思うんです。「こういうのが良いんじゃないか」と言った人の意見のみが通って、環境整備されても、結果的に使い勝手の悪いものが出来てしまえばそれは良くないのではないかと感じています。

障がい者が、というよりは、同じ人として考え、譲り合うことも大切なんじゃないかと

思ったんです。あなたが困るのだったらそこは譲っていく。そうやって障がい者同士もちょっとずつ譲っていった方が、生きやすい社会になるのでは、と考えました。

自分の障がいのことも伝えるべきだし、逆に自分が知らない障がいについても知りたい。そんな環境を作れたらと思い、「さらスポーツクラブ」を作りました。設立して今年（2018年）で10年目です。「さらスポーツクラブ」では子供から高齢者まで、障がいの有無に関係なく、すべての人が一緒に行動することになっています。

「さらスポーツクラブ」の活動で印象に残ったことはありますか？

クラブでは様々なイベントを企画していますが、子どもの頃にどれだけ大人とのいい関わりを持ったかが、彼らの後々の人生に影響を与えるのだなと感じています。例えば、児童養護施設の子供さんたちと色々な体験会をした時に、子供1人につきサポート役として（高校生）1人ずつ付いてもらいましたが、最後は離れたくなくなるんです。彼らが、人に甘えたいという思いをどれだけ持っているかがよく分かりました。

「さらスポーツクラブ」は設立当初は身体障がい者が多かったせいか、障がい者の団体、障がい者のことを考えてくれる団体と思われていたようです。

また、知的障がいの会員さんも多くて、ご家族からはこのクラブを通して自分たちの環境が良くなると思われたようです。しかし私たちは、知的だけでなく、他の障がい者、あるいは健常者の会員のことでも考えて活動してきました。だから、「障がい者のことを考えてくれないんだ」と途中で脱退された方もいます。

様々な障がい者が出席される会議でも、自分たちの団体のことを強く話される方が多いですし、それが分からなくもないですが… 他の障がい者の立場になって考えてみることも必要なのでは、と思っています。


対立するのではなく、互いの障がいを理解しあいたいとの思いなんですね

そうです。分かりあいたいですね。

バリアフリーの整備などで、意見を求められる時は悩みます。責任も重くなるし、安易に答えられないというか… 整備してもらったからには使わなければならないですし。

我々の脊損連合会でも陳情もしますが、やるからには覚悟があるという思いがあります。整備してもらったからには他の人にも使ってもらえるようなものでなくてはならないと思うんです。




 これまで田村さんが交通機関を利用してきて、良くなった点やまだまだだなと感じることはありますか？

いいなあと思うのは、新幹線の乗務員の対応です。とても自然だと思います。よくあるのが、障がい者への「対応マニュアル」があって、その通り対応されてしまうことです。とても固いんです。そして「A か B か」式の質問をされることが多い。そうすると、こちらがどう思っているかを聞いてもらえないんですね。

その点新幹線では、乗ればまず「どうしますか？」と聞いてくれます。「デッキでもいいですよ」と答えると、「もしよければ次の駅でもう少し広いデッキに替わりますか？」と案内してくれるなど、対応が自然です。

以前、ハワイで路線バスに乗った時のことです。バス停で待っていると、バスが停まり、運転手はボタンでスロープを操作し、乗客に詰めるようにアナウンスするだけ。過剰なサービスはないけど、現地の人も障がい者と普通に接してくれるし、運転手もほかの乗客を乗せるのと同じように私を乗せてくれました。違うのはスロープを出してくれたことだけ。

日本では施設整備が進むのに合わせて、マニュアルも整備されてきています。反面、マニュアル通りにしていない時に事故が起これば、責任問題が生じると思い、それが重い足かせになっているのではないのでしょうか。マニュアルができることで、対応も「マニュアル通り」になってしまい、こちらの声を聞いてくれないように感じます。こちらの希望を聞いたうえで、マニュアルや会社の決まりではこうなっていますから… と言ってくれれば納得がいきます。事業者には聞く姿勢を持ってほしいですね。

 当局のバリアフリー教室では、限られた時間の中で、児童に体験してもらったり、お話をさせていただいていますが、どのようなことに気づかれていますか？



また、教室を通して田村さんが児童に伝えたいことは？

車椅子体験は今までは「介助体験」がほとんどだったと思うんですが、小学生の時に実生活で介助する場面はほとんどないのではないのでしょうか。それよりは、車椅子の人が何に困っているかを実際に体験してもらった方がいいのかなと… 段差をこえる苦労とか、マットの上だと走りにくいか、通路の幅が少し狭いだけで通りにくくなるとか。そういった体験で感じたことは記憶に残ると思うんです。だから、もっと多くの児童に体験して貰いたくて、学


校の授業のひとつとして取り入れてもいいのではないかと、思っています。

講師をするうえで心がけていることがあります。「障がい」は子供たちにとっては現実味がない他人事です。ただ自分もなるかもしれないから、今から考えておくということも必要だと伝えるようにしています。

例えば、車椅子だと下にある物は拾いにくい。だから、子どもに拾ってもらいます。「なんで？」と聞かれるのですが、車椅子に乗ってもらったら、「ほら、拾いにくいでしょ」となる。

それから、体験したことは家に帰って伝えてね、と話しています。親御さんも子供の言うことは聞くんですね。駐車場でも、障がい者用の駐車スペースに停めたらいけないよ、と子供から言われれば聞いてくれる。そういう所から、時間がかかってもみんなの意識を変えていければ良いなと思っています。




 「お手伝いしましょうか？」という声かけですが、なかなかできず、難しいなと感じます。勇気がいることだと思うのですが…

まずは、断られると思って声かけすればいいと思います。迷惑だったらどうしよう、という思いが先に立つのではないのでしょうか。それが声かけのバリアになっていると思います。

困っている人を見かけた時には、断られることを前提に「どうされましたか？」と聞いてみてはどうでしょうか。軽く聞けばいいと思います。相手も大丈夫だったら「構いませんよ」と言ってくれるし、必要であれば「お願いします」となります。1回声をかけることができれば、次からは大丈夫ですよ。

私自身も以前に比べると、声をかけられることが多くなりました。それだけ良い時代になったんだなあ、と思います。

 最後に、公共交通機関を所管している当局に対して、意見・要望はありますか

これは行政一般に対してになりますが、バリアフリーに関して熱意を持った方が担当されている時はいろんなものが一気に進みますが、異動で担当者が変わることで対応に大きな差が出るように感じます。進んでいたものが後退してしまう場合もあるのではないのでしょうか。そういうのは本当に残念です。積み重ねられるように進めてほしいです。

難しい部分としては、やはり利用者数の多い施設から順に整備されていくということ。

例えば、機内用車椅子も東京の空港では最新で、クッションも良い。でも、地方空港になると車椅子は古いタイプです。いつ頃変わるんですかと聞くと、利用客の多い空港から順番に変えているのですぐには変わりません、と言われました。

それを聞いて思ったのですが、今でこそインターネットが普及していろんな情報がすぐに伝わるようになったのですが、私が事故した時に、ちょうど最新型の車椅子が出ましたが、高松で同じタイプが買えるようになったのは5年後でした。そのくらい遅れたんです。今でも、興味をもって調べている人は情報をどんどん手にできますが、そうじゃない人は知らないままになり、やはり遅れてしまいます。

駅の整備も同じで、そこで優先順位ができてしまっても、遅れてしまう部分があっても、みなさんが変えようとしてくれているので仕方ないのかなと思っています。

名古屋で私鉄を利用したことがあるのですが、ホームの高さがまちまちでした。都会ですらそういう状況です。全部のホームを整備するのはとても難しいことだと思います。そして、そこでも整備するとなれば、利用者数順になるのではないのでしょうか。それは仕方ない部分なのかなあと思います。

行政として、色々な方が関わってきていることを、少しずつでも積み上げて、進めていただければと思います。



インタビューを終えて

インタビューでは、これまでの活動やご自身の体験を、時にユーモアを交えながら話してくださいました。予定したインタビュー時間を大きく超えてしまうほど、話は尽きませんでした。田村さんにお話を伺い、「障がい者」という見方ではなく、同じ人として私たちがどのように接し、サポートできるのかということを考えさせられました。また、様々な障がいがあることについて、私たちももっと理解していくことが必要であることを感じました。

インタビュー実施日：平成30年12月13日・聞き手：小野、出海